

社会科にとって「よみ」とは何か

社会系教育講座 岩田一彦

社会科にとって「よみ」とは、情報間の関係を構築していくことである。これは、明示できる情報間の関係の場合と、分析的には解明できない総合的關係の場合とがある。総合的なものは、イメージと呼ばれる。

社会科の学習は、「情報間の関係を構築することや、イメージを形成すること」をとおしておこなわれる。本発表では、情報からイメージや関係を構築していく方法と、教科書記述からイメージや関係を構築する授業設計、についてのべる。

1. 情報からイメージや関係を構築していく方法

(1) 書を読む

「読む」といえば、まず書である。社会科の学習の基本の一つは、やはり読書である。情報の無いところで問題を考えることはできない。大量の情報の確保には、何よりも大量の読書が必要である。これまでの社会科学学習を弱いものにしてきた原因の一つに、読みこなし情報量の不足があげられる。

社会科における「読む」には、量をこなす読書と同時に、自分の好みにあった書を繰り返して読む方法がある。大量の情報が点的情報に留まっていたのでは、有効性が低い。情報間の関係がその人の中に、できていることが重要である。10回も20回も繰り返して読んでいる書である。何か問題にぶつかった際には、愛読書の著者ならばどう判断するかを、すぐに答が出せるようになっているはずである。これは一人の著者の書籍群でもよい。

(2) 地域をよむ

実地観察は、社会科学学習の骨格を形成する。その場所に立てば観察ができるわけではない。「よみ」が必要である。同じ場所に立っても、地域観察の達人と素人とでは、その地域からよみとる情報に、天と地ほどの差がでてくる。

この地域をよむ手法も、大きくは二つに分けられる。一つは、できるだけ大量の情報をその地域からよみとる手法と、問題意識を明確にし関係情報のみをよみとる方法である。

前者は伝統的に地誌的研究方法といわれ、後者は系統地理的研究方法と呼ば

れてきた。この2分法は本質的違いを示すものではない。認識の概念装置の明示性との関係で考えることが適当である。

わたくしたちが、地域をよむのには、一定の概念装置が必要である。それは細菌を見るのに顕微鏡が必要なと同じである。地域をよむための明示的な概念装置を示そうとしているのが、系統地理的方法であり、総合の重要性を主張し、概念装置の明示性を出せないでいるのが地誌的研究方法である。

地域をよむためには、明示的な概念装置の形成と、それを組み合わせた総合的概念装置の形成が必要である。

2. 教科書記述からイメージや関係を構築する授業設計

授業設計に際して、教科書をどのように読むかが、一つのキーポイントになる。教科書には、その単元で習得させたい内容が、凝縮して書き込まれている。一般的には、小学校の教科書では、基本的問いとその答が示されている。中学校の教科書では、内容の多さと限られた紙面との関係で、問いを省いて答だけが書かれている場合が多い。

したがって、小学校の教科書では、どのような問いがどのように配置されているのかを読む。次に、それに対して、どのレベルの答が書き込まれているのかを検討するといった読みが、教師の基本的活動となる。この構造と子どもの状態とを絡めて、問いの検討や使える資料の収集状況を配慮して、授業設計をしていく。

それに対して、中学校の教科書の場合には、まず、書き込まれている内容の裏に潜んでいる問いを読み込む作業をする必要がある。例えば、次のような作業である。

「冬の積雪は、北陸のおもな産業である農業に大きな制約をあたえている。麦や野菜などの裏作がむずかしいうえに、雪で木の枝が折れるので、果樹栽培もふるわない。」

この教科書記述には、「北陸の積雪は、農業にどのような影響を与えていますか。」「なぜ、北陸では果樹栽培が、不振なのですか。」といった問いが隠されている。こういった問いを読みとり、構造化していくことが授業設計には不可欠である。この問いと内容が、イメージや情報間の関係を構築していく基本となる。

社会科にとって「よみ」とは、書や地域から、問いをもって情報を抽出し、それを関係づけ、イメージ化することであることを述べた。